

すな お

令和7年3月号

発行所 天理教瀬戸路分教会

〒794-0007 今治市近見町4-5-10

URL <https://www.tenrikyo-setoji.net/>

☎ 0898-23-5004 責任者 二宮英治

発行日 2025.3.16 通巻 No.776



会 長

いよいよと修養科一期講師の御用が近づいてきました。8月に大教会長様からお声をかけていただき、2度の研修会を受講して今月末からとなりました。「事前にしっかりと勉強してきて下さい。」と言われ、そうしなければと思いながら、、、。日々の御用と教会留守中の準備段取りに追われている始末です。しかし、日々忙しくなればなるほど、身上で寝たきりになっていたことを思えば本当にありがたい限りです。

世間一般では「喉元過ぎれば熱さ忘れる」と言われますが、私たち信仰者は「入信の元一日を忘れないように」と常々言われます。その基本を忘れなければ足元を掬われることはないでしょう。

先月の月次祭において、私たちの信仰に繋がる【親会長さん】を導いた【木村貞子8代葛城分教会長さん】そして、その木村貞子さんを導いた【植木ハツさん】の話をさせていただきました。私たちは日々前を向いて生きていますし、身体の全てがそのように作られています。もちろん後ろ向きに進むことも出来ませんが、どちらが楽で早く進めるかは言うまでもありません。このことから陽気ぐらしを人生の目標として生きる私たちは、ほとんどの時間を使って未来に向かって進むことを考え行動することは同然のことです。

でも、時にはスタート地点を振り返り、それぞれが目標とする陽気ぐらしというゴールにちゃんと向かっているかを確認することが必要だと思います。そのことによって神様にいただいている御守護の大きさを感じることも、教祖に導いて頂いている実感も感じる事が出来るのではないのでしょうか。しかしそれは前へ進んでいるという前提での話で、もしかしたら前進しているつもりだったのに、いつの間にやら元の場所にいたりもっと悪くなっていたりしていることもあるやもしれません。

信仰しているから前進しているとは言い切れません。形は信仰しているようであっても日頃から不足ばかりで通っているなら、陽気ぐらしの思いとはまるで逆方向ですから、どんどん運命は下がっていきます。教祖は世間一般から見ればとんでもない状況であっても、喜んで通られました。それがひながたです。教祖以上の苦勞をしている人はいません。ですから、喜びの種は必ずあります。

どうか、この教祖の年祭を迎えるこの時期にこそ喜びづくめの心を積み重ねて、その方法を知らずに苦しんでおられる方に親の思いを伝えてあげてほしいと思います。



瞬間的に御守護を感じる

二宮 真悟

僕が小学生ぐらいのころです。まだ親会長さんがご健在で、毎朝1人ずつ朝づとめ前に挨拶にあがるというのが日課でした。2階の部屋に上がると、机の上に五七五くらいでお道の言葉が書かれた半紙が置かれています。それをまず声に出して読み、そうすると、間髪入れずに「それに対して自分が思ったことを返答せよ」と言われます。その厳しさに、当時は幼いなりにもお道としての自分の考えを答えていました。

最初は何も答えられないのですが、1ヶ月もするとリアルタイムで返答できるようになってきます。当時は訳も分からず言われるがままでしたが、そういったやり取りのお陰で、あらゆるシチュエーションで瞬間的にお道の考え方が出来るようになって、高校のマーチングや専修科、大教会生活でも明るくやり切れたのかなと改めて思っています。

ですが、今となっては日々の生活は仕事に終われ、毎月の講社祭で会長さんからお道の話聞く程度になってしまいました。またそれも日課になり、講社祭でふいに会長さんに「これに対して真悟はどう思う？」と聞かれても返答に時間がかかるか、答えられなかったりします。恥ずかしいものです笑

何事も練習。これからは当時を思い出して1日1回、ご守護探しをしてみようかなと思います。ふとしたことにも教えを紐付け、ご守護を感じれるようになりたいものです。

《教会ニュース》

4月教祖誕生祭参拝

来月4月18日は教祖227回目のお誕生日です。おちばへ帰りお祝いをさせていただきます。今治から帰られる方は教区バスを利用します。17日出発で19日に帰ってきます。帰らせていただきたい方は、来月7日までに教会まで申し込み下さい。費用等詳細は個別にお伝えします。よろしく願います。

会長 修養科一期講師

今月末より6月末までおちばにて御用をつとめます。教会を留守にしますが、我が教会と思ってそれぞれが出来ることを精一杯おつとめください。そしてたくさんお徳をいただいでください。



編集後記

だんだんと春の足音が近づいてきました。新しい生活に向けて準備を進めている人もいることでしょう。期待と不安が入り混じる中、それぞれの思いを胸に抱きながら、新たな一步を踏み出して欲しいと思う今日この頃です。（編集者K）